
このベンチから君の幸福を

いたる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

このベンチから君の幸福を

【コード】

N8969G

【作者名】

いたる

【あらすじ】

失恋した男の身勝手な空想。果たして、彼は神様に何を願うのか。そして、その時神様は……

じいさんは神様かもしれない。

俺はおにぎりをかじりながらそんなことを思った。

じいさんは相変わらず何もしゃべらず、動きもせず、目を閉じているのか開いてるのかわからないくらいに細くして、一体何を見ているのか。昼下がりのうらかな公園で、このベンチに座ってタバコをぶかぶか吸いながらその目で見ている景色って。

俺も毎日バイトの休憩中に、このベンチで350m1のお茶を飲みおにぎり二個を食べるけれどもこの公園は変わり映えなんかしないんだ。ほら今日も若いママさん達が、お互いの表情探り合いながらひそひそひそひそ無駄話。子供たちは砂場の近くで輪になって、携帯ゲーム機で鬼ごっこ。飼い主と散歩しているでかい犬は、まるで見張っているようにその子供たちをまんじりと睨み、手綱持つてる。飼い主はぶくぶくと肥えた腹を揺らしながら陽気に鼻歌歌っている。隣に建ってるアパートからは、テレビのワイドショーの音と、ヒステリックな女の声が聞こえ、一階の部屋の網戸越しに真っ昼間から見せびらかすように性交する男女が見える。あんたたちのその行為は、子供が見てる。子供が見てる。

ああなんて幸せな俺の昼休み。

くだらなき、この世界。くだらなき、俺。

良いことは少しずつしかやってこないのに、悪いことはいっぺんにやってくる。

ある雑誌に載っていた、しし座の今月の運勢。12星座中、11位。12星座中12位より11位っていううち中途半端な順位の方が悪い

ことが起こりそうである。実際それは恐らく当たっていた。

四年間片思いした女に振られ、三年間やっていたバンドを一方的にクビになり、家賃を払うために下ろした七万円をどこかにおとし、それを半べそかきながら探しているときに、よそ見運転のチャリにひかれ、怪我したた右足を治療するために通った接骨院の婦長（49）に惚れられ、毎日家の前で愛の手紙とキスを迫られる俺って一体。

じいさん、あんたが神様だったら、こんな世界つくってくれてあげがとうと言いたい。

この世界のくだらなさに比べたら、俺のくだらなさなんて鼻くそみてえなもんだ。そうだろ？

じいさんのタバコの煙が目に入って、思わず俺は目を閉じた。

例えばだ。例えばこの漠然としたこの宇宙といふ概念。俺が彼女に振られたって、その宇宙には何一つも波紋なんて起こらない。皮肉にも、このうららかな日常。日常！日常！

世界が美しく見えるのは、どこかで不幸が起こるから。

そんな被害者意識丸出しで、自分ばかりかわいそう、哀れに思われて当然、どうか誰か俺を愛でてくれ！慰めてくれ！なんていうまったくもって身勝手にエセ悲劇的なことを思いながら、俺は今日も生きている。

ああ、あの醜く太った婦長の腹と唇に、俺はハルマゲドンを起こしてやりたい。

人間誰しも自分の不幸は世界の絶望だし、他人の不幸は密の味。

結局俺に起こったこの今月のツいてなき事。それは他人にとっては貴重な糖分とタンパク源。

だからじいさん。

笑ってくれ。

明日またここに来れなくなるほど俺のことを笑ってくれ。このバカみたいな俺の頭の中の独白。口には出さず、あなたの耳にも聞こえないこの独白。

俺はじいさん、あなたに向けている。

だから笑ってくれ。

俺は笑われて楽になりたい。

だけど、口にも出さないこの独白を、一体どうして話もしないこの老人が笑ってくれよう。

あなたは何故俺の前で言葉を口にしないんだ。

俺が初めてこのベンチであなたに話しかけた時、あなたはやっぱり何も答えず目を細くして、タバコをふかすだけだった。

世界中にはもつと救われるべく人間はたくさんいるのに、俺は、俺だけが救われればいいとどこかで感じている。

「…私好きな人いるから…ごめんなさい」

ああ、あの日由美子はそう言った。本当に申し訳なさそうな口調で、俺に小さく頭を下げた。俺はそのたった今自分を振った女を見下ろしながら、言いようのない非現実的な感情の波と、脱力感に襲われていた。

君は、君は、その好きな人と幸せになるんだろう。そんなの、そんなの、

許せない。

失恋なんてそんなもんだ。結局自分が世界で一番かわいそうで、惨めで、傷ついたと思っっている。

じいさん。世界を終わらしちゃってくれ。

好きなんだ。この感情が許せない。

好きなんだ。

昼休みが終わる。

俺は頭の中でじいさんに向かって散々愚痴を言い、最後にお茶を飲み干した。

さあ行くか。今日も元気にコンビニ店員。色んな感情と戦いなが

ら、俺は今日もレジを打つ。

じいさんは、やっぱり何も話さない。

結局俺一人で盛り上がって、今日もなんの打開策も思いつかない。

今夜も万年床の中で、のたうちまわるだろう。

でもいい。

それでも世界は美しい。ぶくぶく太れ。

そして死ね。

俺はベンチから立ち上がって歩き出す。

公園には、いつの間にか誰もいなくなっていて、網戸越しに行われている性交が、やけに生々しい音をたてていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8969g/>

このベンチから君の幸福を

2010年11月2日03時46分発行